
魔王降臨伝ON I

まるさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王降臨伝ONI

【Nコード】

N3067Y

【作者名】

まるさん

【あらすじ】

ホムラベキリマル 炎部鬼吏丸はオニ隠忍である。

神殺しの魔王とまつろわぬ神、そして守護たる鬼神が交わる時、世界は新たな物語を紡ぎだす！

この小説は『カンピオーネ！』と『ONIシリーズ』の（一応）クロスオーバー作品になっております。

オリジナル要素が多々入りますので、そう言うのが嫌な人はご遠慮ください。

神殺しのいる風景（前書き）

妄想が溢れだしたらこんなものを書いてました。
楽しんでいただけたら幸いです。

神殺しのいる風景

「き、来たぞ、鬼吏丸キリマル！あ奴が来た！」

授業が始まるまでの間をまどろみながら待っていた炎部鬼吏丸ホムラベキリマルは、甲高い子供の声で覚醒した。

「もう来る！もう来る！……ほら来たあっ！」
「うるせえ」

その声に促されるように教室の後部扉を見れば、件の人物——草薙護堂が入ってくる所だった。

「羅刹の化身だぞ！神殺しだぞ！怖いな、なあ鬼吏丸、怖いなあ！」

「そんなに怖いなら学校に来なきゃいいだろ、お前」

周囲の者に聞こえぬよう、鬼吏丸は小声で話した。

「何を言うか！」

そう言つて、声の主——倉ぼっこは何故か胸を張った。

「我は数百年とこの地に生きる大妖怪ぞ！さればこそ、あのような暴虐の輩が何かせぬか、監視せねばならぬのだ！」

「……じゃあ万が一草薙が暴れ出したら、お前が戦えよ？」

「たわけ！」

倉ぼっこは偉そうな態度を崩さない。

「我の様な高貴な大妖怪はその様な荒事はせぬ物だ！ゆえに、あの神殺しと死合うのは、主の役目ぞ！」

「……草薙より先にぶっ飛ばしてやるーか、このガキ……」

歯ざしりする鬼吏丸を放って置いて、倉ぼっこは再び「怖いな、怖いな」とやりだした。

その姿はどう見ても度胸試しに怖い犬を触りに行くような、ガキの姿そのものであり、本人自称の大妖怪の威厳など欠片も存在していなかった。

因みに、倉ぼっこは周りの人間に姿が見えぬように術を己に掛けているため、気をつけないと鬼吏丸は虚空に話しかける危ない人と思

われてしまう。

自身の境遇と、面倒くさい同居人、更にはきな臭い同級生と厄介事が束になってかかって来ているように感じた鬼吏丸は高校生らしからぬ深い深いため息を吐いた。

かつて、この地が秋津島と呼ばれていた程の古来より、オニ隠忍、或いは鬼神と呼ばれた者達がいた。

彼らは人の心と妖の力を持つ守護者達。かの地に危機迫る時立ち上がり、人に知られずまでもこれらを打倒し、封じて来た。

そして、炎部鬼吏丸は、その隠忍達の末。現代に甦った、鬼神である。

神殺しのいる風景（後書き）

…… やっちゃったよorz。

別の連載小説書いてんのにまた連載なんて立ち上げてるよ……。

そんな理由で、この小説はわりと不定期な更新になると思います。

書き捨てたりはしないので、そこだけは安心してください。

次回は…… いつになるんだろう（笑）。たぶん、主人公達の設定を公開するかと思います。

それでは、また次回。

主人公設定（前書き）

思ったより早く更新できた……！
本小説でのメインキャラクターの設定です。

主人公設定

名称：炎部 鬼吏丸《ホムラベ キリマル》

年齢：十六歳

容貌：身長は190？台とかなり背が高い。黒髪黒眼、割と整った顔立ちをしているが、目つきが鋭すぎるのと背の高さのせいで、その要素はむしろ威圧感を与えするというマイナス要素にしかっていない。

備考：十五歳になったばかりの頃、とある事件のせいで魔神器の一つ『鬼雷石』によって隠忍に覚醒する。

特殊能力：地張流忍術・転身

所有魔神器：『鬼雷石《キライセキ》』

隠忍名称：紅蓮童子《グレンドウジ》

備考：鬼吏丸が『鬼雷石』の力によって転身した鬼の化身である隠忍。

特殊能力：鬼神拳

鬼神拳設定：はつきり言って「無限のフロンティアEXCEED」の鬼神拳その物です。オリジナリテイのない作者ですいません。

とある事件設定：簡単に言うと封印されていた倉が開かれ、魔神器が世に流出してしまった事件。小説内の現在においては既に解決済み。

名称：葛葉 凜音《クスノハ リンネ》

年齢：十七歳

容貌：身長は180？台と女子にしてはかなり高い。長い黒髪を高い位置で結わえ流している。目鼻立ちの整った美人なのだが、可愛いというより格好いいと言う感じのため、女子に慕われるのが悩み。実家に伝わる剣術を嗜む。

備考：鬼吏丸が隠忍となる切っ掛けとなった事件に偶然関わってし

まい、その結果魔神器の一つ『姐己絵図《ダッキエズ》』の所有者となる。

特殊能力：古流剣術・転身

所有魔神器：『姐己絵図』

隠忍名称：銀孤麗姫《ギンコレイキ》

備考：凜音が『姐己絵図』の力によって転身した銀の狐の化身である隠忍。

特殊能力：妖狐妖術

名称：倉ぼっこ《クラボツコ》

年齢：数百歳

容貌：7、8歳ほどの男の子の姿。

備考：魔神器の封印されていた倉の管理人なのだが、とある事件によって目覚め、同時にばらまかれた魔神器の回収を鬼吏丸に強要した。事件が終わった後もあまりに様変わりした世の中を面白がり、鬼吏丸の家に居候する。

名称：チャンドラ

年齢：不明

容貌：壺。

備考：鬼吏丸の先祖とも関わりのある「まつろわぬ神」。芸事を司っているが、元を辿ると相当有名な神の分霊《ワケミタマ》らしい。現在は魔神器の一つ『咤枳尼天壺《ダキニテンコ》』に宿っている。とある事件の際に倉ぼっこの手により連れて来られ、そのままやはり居候中。何故か関西弁を話す。

名称：ウルーピー

年齢：数百歳

容貌：薄紅色の長い髪をしたスタイル抜群の美女。しかし本性を現すと、下半身が蛇身となる。

備考：チャンドラの奥さん。ナーガ龍族の王女の娘だが、本人はその立場をぶつちぎって何百年もチャンドラと一緒にいる。チャンドラの事が大好き。チャンドラが鬼吏丸の所へ連れて来られた際、当たり前前のように着いて来て、現在も当たり前前のように傍にいる。

……こんな感じのメンバーで話を進めて行きたいと思ってます。感情移入のほんの一助にでもなれば幸いな設定集でした。

主人公設定（後書き）

「ONIシリーズ」はまだまだ大好きなゲームの一つです。ONIと聞くだけでテンションが上がるくらいに。
では、次は本編でお会いしましょう。

一家に一つ、喋る壺（前書き）

俺、いつか「ONI零」の続きが出るって、信じてるんだ……。

一家に一つ、喋る壺

その日、炎部の家の食卓を4人の人物が囲んでいた。

一人は家主たる鬼吏丸。

もう一人は自称大妖怪、年齢数百歳のエターナルシヨタ、倉ぼっこ。もう一人は薄い紅色の長い髪をした、スタイル抜群の美女。

そして最後の一人は――壺、である。

「はい、チャンドラちゃん、あ〜ん？」

美女――ウルーピイが今夜の夕食であるおでんの大根を壺の中に箸で入れる。

「あ〜ん、ってあつっ！？あつっ！？つ、壺やから逃げられんし！？」

チャンドラと呼ばれた壺ががたと動きながら喚いた。

「お主ら、『咤^{タキニテンコ}枳尼天壺』をあまり汚すでない！」

さつきからおでんの卵ばかり食べている倉ぼっこがその様子を見て怒る。

「なんだこれ」

改めて自身の置かれた状況を見て、その異常さを認識した鬼吏丸がため息を吐いた。

（まあ、ちよつと前までの寂しい夕食に比べれば、まだいいか）

ここ一年で急に人口密度の増した我が家を、鬼吏丸はそれほど悪くは思っていない。

「ウルーピイ、今度は卵喰わせてえな」

「はい、チャンドラちゃん？」

「待つのだ！ここにある卵は全て我の物だぞ！」

「はあ〜？卵に名前でも書いてんのか、がきんこ。大体子供が偏食したらあかんやろ。野菜も食べ！」

それほど悪くはない……。

「誰ががきんこだ！お主は昔っから我をそう呼びおって！無礼であ

ろっ！」

「だってわしの方が年上やし。それにわし神様やし。がきんこより偉いも〜ん」

「くうう〜っ！に・く・た・ら・し・い・ぞ〜！なんでお主が神なのだ！全然らしくないであろう！」

「常葉丸にもよ〜それ言われたわ。実際、わしも清志郎はんの方が神様っぽかったって自分でも思うし」

「そんな事無いよ〜。チャンドラちゃんはある、ちや〜んと神様できてるよ〜」

「お〜、ありがとな〜ウルーパイ」

「どういたしまして〜？」

悪くは……。

「いちゃいちゃするでない！子供もおるのだぞ！」

「なんや、自分の事かいな。わかつとるやないか、がきんこ」

「がきんこって言うなー！」

「チャンドラちゃん、卵だよ〜？」

「あんがと、ウルーパイ……って、あつっ！？またあつっ！？」

「『魔神器』を汚すなー！！」

「うるせえっ！！飯ぐらい静かに食べっ！！！！」

あまりの行儀の悪さとうるささに、鬼吏丸はついにキレた。

最近の炎部家は、いつもこんな感じである。

一家に一つ、喋る壺（後書き）

短いけど、以上です。

「彼ら」の日常はこんな風に進んでいます。

次回からは第一巻突入編。と、言ってもかなり最後の方から関わり出しますが。

それでは、また次回。

鬼神降臨（前書き）

お久しぶりです。

もう一つの二次小説が一段落ついたので、こちらを更新します。

鬼神降臨

まつろわぬ神アテナは、草薙護堂に敗れ、夜の闇を彷徨い歩いていた。

思えば不思議な神殺しであった。

文明人、常識人を名乗りながら、いざ戦えば勝利のためにあらゆる手練手管を使う少年。

そして、古き女神である己に勝利したにも拘らず、その権能を篡奪しようとしなかった神殺し。

「草薙護堂、か」

その名を口の中で転がす。

あの場では再戦を濁したが、アテナ自身としては再会の果てに戦い、今度こそは勝利したいと考えていた。

それがいつになるかはわからないが、今はそれに備え回復を図るべしと思ったアテナは、己の信仰がまだ色濃く残るヨーロッパに向かい、体を休めようとしていた。

「む……」

その時、アテナの足がぴたりと止まる。

視線の先には、闇。だが、確かにそこに何かいる。

「何者か。このアテナの行く手を遮るのは」

その言葉と同時に、視線の先の闇がぐにやりと歪み、そこから二つの人影が吐き出された。

「おお、流石はまつろわぬ神よ！我が『かくれみの』を見破りおつたぞー！」

そう言ったのは、7、8歳程の姿をした子供。

「……いいから、俺の影から出てから、そういう偉そうなセリフを言え」

足に隠れたまま、顔だけだしながら喋る子供にうんざりした様な声を出すのは、先に戦った神殺しと同じくらいの年頃の少年。

「アテナみたいな大神が、がきんこの術ぐらいなら見破れん筈がな
いやろ」

もう一人の声があるが、姿は見えない。

訝しむアテナだが、その声の出所が少年の持つ異様な気配を発する
壺から出されている事に気付いた。

それと同時に、その声の主が己と同じ『まつろわぬ神』である事も。
「何処の神かは知らぬが、妾に何用か」

険しい顔をするアテナとは対照的に、壺の中の声は軽い調子を崩さ
ない。

「そないに怖い顔せんでも。姿を消してたのも、神殺しに見つか
るとややこしい事になるからや。で、あんたに用うちゅーのはな……」
声はそこでほんと一つ咳払いをすると、殊更に明るい感じで言い
放った。

「そこのお嬢ちゃん、わいらと一緒に茶でもせえへんか？」

「……は？」

その予想外すぎる言葉に、女神アテナは思わずらしからぬ間抜けな
声を出していた。

「お茶でーす」

「……うむ」

桃色の髪をした女から出された茶を、アテナは固い声で応じて受け
取った。

現在アテナは、平屋にある畳敷きの居間に座っていた。

自分でも、何故壺の声に従ってこうしてお茶を啜っているのか、理
解し難い所があった。だが、自分以外の『まつろわぬ神』の言葉か
ら逃げるのも、アテナにとっても面白くなかったのである。

（何かの罠かと思ったが、まさか本当に茶を飲むだけとは……）

アテナはやたらと美味しく感じるお茶を飲みながら、ちらりと周囲

を見回す。

この場には、現在壺と自分を含めて5つの存在がある。

まず、人間の少年。奇妙な事に、『まつろわぬ神』である自分を前にしても、何の影響も受けている様には見られない。目を凝らしても、只の人間以外には見えないのに。

そして、子供の姿をした人外。精霊の類の様であるが、かなりの力を持っておりるように見受けられる。

先程から、ひたすらお茶菓子を貪っている。

そして、自分や周囲の者達に茶を配っている桃色の髪をした女。どうやら古い龍神の末裔らしく、こちらも神に及ばずとも相当に強い力を持っている。

最後に、壺。この壺自身も異様なほどの力を有しているようだが、その中にいる『まつろわぬ神』もかなりの神格を有しているのがわかる。本体ではない様だが、「分身」自体も神として成り立っており、ましてや、本体ともなれば、自分に匹敵する格の存在であろう。『人』、『精霊』、『龍』、『神』。

全く異なる存在同士が、同じ机で茶を飲んでいる光景と言うのは、アテナにしても初めてみるものだった。

「……さて、それでは、妾をここに連れて来た本当の理由を話して貰おうか？まさか、神同士、只茶を飲みたいと思った訳ではあるまい？」

ことりと湯のみを置いたアテナが、鋭い視線を壺に注ぐ。

「あ……。それなんやけどなあ、実は自分にお願いがあつたんよ」

桃色の髪の女——ウルーピィに甲斐甲斐しくお世話をされながら、壺ことチャンドラは言う。

「お願い？」

「おお。怒らんで欲しいんやけど、自分、神殺しに負けたやん？」

「く……！」

敗北の記憶を容赦なく抉るチャンドラの言葉に、アテナの視線の陰しさが増す。

「だから怒らんといてって。でも、何の因果か権能を奪われる事も無く、こうして無事であるちゅー事は、神殺しに見逃されたんやろ？」

「……！！」

アテナはついに歯ぎしりまでし始めた。その表情はかなり恐ろしい。「ま、まあまあ、ちよつと落ち着いてくれ。別に自分の事を馬鹿にしようとかそういうわけやない。ワイが聞きたい事はこっからや。自分、これからどうするつもりやねん？」

「どうする、とは？」

険しい表情のまま、アテナはチャンドラに問い返す。

「あの神殺し——確か草薙とか言う坊^{ほん}やったな。あの坊に対して、再戦を挑む気いはあるかつちゅー話や」

「無論だ」

アテナは即答した。このまま、敗けっぱなしで終われるほど、太古の女神の名は安くはない。

「やっぱりかー……」

チャンドラがぼやいた。その言葉には苦い物が含まれている。

「まあええ。自分とあの坊がまた戦う事に関しては、構わへんねん。問題は、そこから生じる被害についてや。……ウルーピイ」

「はい」

チャンドラに指示されたウルーピイが、テレビの電源を入れる。

映し出されたのは、アテナと護堂が戦った事による被害状況が延々と報道されている特別ニュース番組である。

「今、東京はこんな具合や。ワイらと神殺しがぶつかれば、こうなる事は目に見えとる。せやけどな、ワイは現世に、ちゅーか、この国もつかれこれ数百年はおるし、この国の事が大好きや。そこに住んどる人間も含めてな」

とつとつと語り始めたチャンドラの話、アテナは黙って聞いている。

「上から見下ろして、命数で人間を勘定する様な真似は嫌やねん。」

そう言う訳で、ワイのお願いっちゅーのは、戦うなら、この国や人間達に迷惑かけんようにして欲しい、と言う事や」

「それは、我からもお願いするぞ」

倉ぼっこが突然話に入って来た。

「神殺しと神の戦いで被害をこうむるのは、何も人間だけではない。精霊や力の弱い妖達は、戦いの余波だけでも傷ついておる。我はこの辺り一帯を治める大妖怪として、それらを看過する訳にはいかなのだ」

倉ぼっこは、その時ばかりは普段見られぬ威厳めいたものを放ちながら、アテナを見据えた。

「外つ国の古き神よ、我らの願いを聞き届けてはくれんか？」

「……断る」

アテナは毅然と言い放った。

「妾は闇と大地を滑る古き地母神。何ゆえ、人の子や、弱き妖物の事など考慮せねばならぬのだ。妾にそれを強いると言うならば、妾を打ち倒してみればよい。あの草薙護堂の様な」

その傲慢な言葉に、チャンドラと倉ぼっこはやはり、と言う様にため息を吐いた。

『まつろわぬ神』と言うのは、本来はこういう存在なのだ。傲慢で、自信家で、他者の事など省みない、天災の様な存在。

チャンドラの様な『まつろわぬ神』が珍しいのだ。

「ならば、致し方あるまい」

倉ぼっこが強い決意を秘めた瞳でアテナを睨む。

「……せやな」

チャンドラもまた、放つ神気の度合いを強める。

（来るか！）

アテナが、二人の様子に身構える。

しかし、そんなアテナを余所に、チャンドラと倉ぼっこは視線（チャンドラはよくわからないが）をそのまま、今の今まで全く言葉を発しなかった少年にシフトして、言った。

「鬼吏丸、お主の出番だぞ！」

「鬼吏の坊、いてこましたれ！」

「ぶふうーっ!？」

いきなりのご指名に、鬼吏丸は思わず含んでいたお茶を吹き出していた。

座卓に飛び散ったお茶をウルピーが「あらあら大変」と言いながら綺麗に掃除していく。

一方の鬼吏丸は、激しく噎せながらなんとか二人に言い返す。

「こ、この流れで、何で俺の名前が出てくんだよ!? お前らはあほか!！」

「失礼なやつちな」

「まことに」

普段は仲が悪い癖に、こういう時だけ意見を一致させるチャンドラと倉ぼつこに、鬼吏丸は歯ぎしりしたい気持ちで一杯だった。

「ワイらは別に意地悪で言うとする訳やないで、坊。もしワイがアテナみたいな神と戦うとなれば、それこそ本性を顕わさなあかんやろ? ワイの本体とアテナがぶつかれば、この国はむちゃくちゃになつてまう。それだけは避けなあかん」

チャンドラが最もな事を言う。今は芸事の神として奉られているチャンドラだが、その本性は『破壊神』。確かに、迂闊にその力を解放する訳にはいかない。

「そして我だが」

倉ぼつこが次いで言う。

「幾ら大妖怪たる我とはいえ、『まつろわぬ神』に勝てる筈があるまい!」

「情けない事を偉そうに言うんじゃねえ!」

何故か胸を張った倉ぼつこに、鬼吏丸は容赦ない突っ込みを入れた。「ほう。まるでそなた等の口ぶりは、この人の子が妾に勝てると申しているように聞こえるが?」

その時、事の成り行きを見守っていたアテナから低い声が聞こえた。

アテナからすれば、何の力もない人間の少年が、自分に勝つ事が当たり前と言われているように感じたのだ。

そんなアテナを更に挑発するように、チャンドラと倉ぼっこは更に言葉を続ける。

「ように、ではない。鬼吏丸ならば、お主に勝てると言っておるのだ。もちろん、実力で、だ」

「せやな。鬼吏の坊なら、ラクショーやな」

「そこ、無駄にハードル上げるんじゃねえ！」

慌てて鬼吏丸が二人の口を塞ぐが、時すでに遅し。

「ふ、ふ、ふ……。そうかそうか。このアテナ、ここまで侮辱された事は、草薙護堂ですらなかったわ」

怒りに震えたアテナが立ち上がり、鬼吏丸達を睥睨していた。

「よかるう。そなた等の口車に乗ってやろう。人の子よ、妾と戦うがよい！」

「ちくしょーっ!!」

チャンドラと倉ぼっここの思う通りの展開に、鬼吏丸は激しく慟哭した。

「で、ここはどこだ」

鬼吏丸は、現在の自分が置かれている状況を、倉ぼっこに尋ねた。

鬼吏丸達は、戦う場所を提供するから、というチャンドラの言葉に従い彼の壺の中を覗き込み、今に至る。

見回せば、延々と広大な土地が広がるばかりで、建造物らしきものは何もない。

「ここは『咤枳尼天壺』^{タキニテンコ}の中だ。チャンドラめ、壺中天の術などいつの間に覚えよったのだ」

倉ぼっこが面白くなさそうに言った。

「壺中天？」

聞き慣れぬ言葉に、鬼吏丸が疑問符を浮かべる。

「壺や箱の中に自分だけの異界を想像する術だぞ。大昔の仙人達が好んで使っていた術だ」

「能ある鷹は何とやらつてな。どや、ここなら思いっきり暴れても平気やる」

その時、背後から聞こえて来た声に鬼吏丸達が振り返ると、そこに頭にターバンを巻いた浅黒い肌の男がいた。

チャンドラの本来の姿である。その傍らには、ウルーピイが嬉しそうに腕をからませている。

「……その姿を見るの、何か久しぶりだな」

インド人です、と物語っている様なチャンドラの姿を、鬼吏丸が感慨深げに見る。

「そんなに見つめんという。ウルーピイが嫉妬してまうわ」

「鬼吏ちゃん、チャンドラちゃんは渡さないから！」

「頼まれてもいらんわ！」

チャンドラの腕をぎゅうと抱きしめながらこちらをキッと睨むウルーピイのずれた言葉に、鬼吏丸が激しく突っ込んだ。

「……もういいか？」

それまで黙って待っていたアテナが、どことなく疲れた様に聞いてきた。

「おお、すまんすまん。あ、それと言い忘れてたけど、さっき自分に出した茶あやけど、あれには特別な薬が入っとな、神気も完全に回復しとる筈やで」

「む、確かに」

アテナは、護堂との戦いで限界まで消費されていた己の力が完全に戻っているのを感じていた。

「神丹だぞ。昔、大陸の異界に行った常葉丸が持って帰った物だ。

神さえ癒す妙薬だぞ」

倉ぼっこが説明した。

アテナはそれを聞いているのかいないのか、取り戻した力を解放し、

幼い少女の姿から太古の地母神の姿へ変貌する。

「む……」

その時、アテナの眉が顰められる。

解放した力に伴い、放射された死の息吹を浴びても、目の前にいる少年が何の変化もない事に気付いたのだ。

（なるほど、『まつろわぬ神』と精霊が推すだけの事はあるか）

アテナは少年を只の人間と見るのを止め、その動向を油断なく窺った。

「あちらさんはやる気やで、坊。いい加減、腹括りや」

「……わかつたよ……」

深い深いため息を突き、鬼吏丸は思考を切り替えた。

こうなつては、戦う以外に道はない。そうなれば、真剣にやらねば殺されてしまうだろう。

「乗せられた感が凄えけど、やってやらあ。悪いが、覚悟して貰うぜ？」

鬼吏丸が獰猛な笑みを浮かべる。

「善き哉！その大言壮語、吐くに相応しい力があるならば、このアテナに見せてみるがよい！」

アテナが高らかに言う。

「言われなくとも！」

鬼吏丸が全身に力を込める。

途端、鬼吏丸の体から、人間ではありえない膨大な神気と、そして妖気が放たれる。

「転・身！！」

次の瞬間、鬼吏丸の体が、突如湧き上がった炎に包まれる。

「これは！」

その光景にアテナが瞠目する。

「アテナよ、括目するがよい！これより汝が戦うのは、この国の真の守護者の裔。隠れて忍び、邪を断ち、魔を討ち、神を斬る、『鬼神』の姿よ！」

倉ぼっこが己と数百年共にあった一族の姿を謳い上げる。

その言葉が終わると同時に、繭の様になっていた炎が割れ、その姿を異形に変えた鬼吏丸が現れた。

纏う鎧は朱金に輝き、たなびく髪は炎に様に紅い。その容貌を鬼面に換え、額からは白銀のような一對の角が天を突く。

「鬼神降臨！紅蓮童子！！」

鬼吏丸——紅蓮童子は、雄々しく自らの名乗りを上げた。

鬼神降臨（後書き）

お待たせし過ぎて申し訳ありません。

主人公が漸く転身しました。

次回はアテナと紅蓮童子が激しくぶつかり合います。

……後、アテナの口調に違和感を感じても、スルーしてください。
それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3067y/>

魔王降臨伝ONI

2011年12月29日00時53分発行